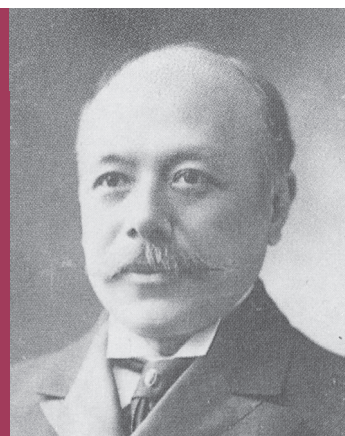


# 野呂 景義 小伝

Kageyoshi Noro



野呂景義氏は、安政元年（1854年）8月26日愛知県に出生、明治15年（1882年）7月東京帝国大学工科大学採鉱冶金学科を卒業、ロンドン大学へ留学、機械学と電気工学を専修後、ドイツのフライベルグ鉱山大学では、もっぱら製鉄の理論と実戦を鍛えられた。明治22年（1889年）4月に帰国、直ちに帝国大学工科大学教授に任じられ、明治24年文部大臣より工学博士の学位を授与された。

以来今泉嘉一郎氏・香村小録氏・服部漸氏・俵国一氏ら、のちの鉄鋼界ならびに日本鉄鋼協会の代表的な担い手たちを育成するとともに、釜石鉱山田中製鉄所をはじめ各地の鉱山、製鉄の現場に出張して、その技術指導に当たり、首相松方正義、農商務大臣榎本武揚らの要請に応え、製鉄所建設運動を展開した。

松方首相らの依頼をうけた野呂氏は、1891年のころ「鉄業調」と題する製鉄所建設論を起草し、鉄と日本文明に対する見解をひろく国民に提唱した。

第9回帝国議会において官営製鉄所設立案が成立した背景には、野呂氏を先頭とする日本人の自主技術開発活動、榎本武揚らの先駆的な産業指導者・技術者たちの創造的な精神があった。

野呂氏は、官営八幡製鉄所の技術的確立に大きな貢献をはたした後も、引き続き民間にあって、わが国鉄鋼界のために尽力し、その造詣深い鉄冶金学の学識と卓越した技術とをもって、八幡のほか釜石、日本鋼管、仙人鉄山、室蘭、本溪湖など各地の製鉄所建設とその技術指導を行った。

この間、大正3年（1914年）6月に在京の門下生、今泉嘉一郎氏、香村小録氏、俵国一氏らによびかけて「わが国において鉄および鋼に関する事業の発達を助成する目的をもって一つの協会を組織せん」ことをはかり、その後服部漸氏も主唱者に加わり、1915年2月6日、日本鉄鋼協会を設立、選ばれて理事長、ついで初代会長となった。工科大学教授時代の最も愛する教え子たちとともに鉄鋼の専門学会をつくることにより鉄冶金学と製鉄技術の自立発展のための新しい大きな礎石を敷いたのである。

この学会は鉄鋼の科学と技術の連携のみならず、経済の問題をも追求することを目的とした。野呂氏の論考「製鉄業に関する合同」は本会の発足当時における代表者の技術思想をよく表している。①学理と実業 ②資本と労働 ③同業者 ④政府と民業者 のそれぞれの連携によって「万業と基」としての鉄鋼業は、はじめて確立されることを打ち出した。「学理と実業」の連携理念は、1926年11月の研究部会設置（製銑、製鉄、鋼材、鋳物、鉄鋼科学の5部会構成）に生き、共同研究会へと引き継がれた。

野呂氏は大正11年（1922年）3月来の肺炎の予後で病床にあり、自らの冶金学関係蔵書をほとんど寄贈して出来た日本鉄鋼協会の会館（芝烏森）が大正12年9月1日の関東大震災により煙滅した悲報に接し、9月8日に永眠した。享年70才であった。

長年にわたり鉄鋼協会の事業推進のため特別の功労のあった者に協会事業功労賞（10年ごとに1回）の授与を行ってきたが、創立60周年記念時に名称を野呂賞と改め毎年授与することにした。